

SONRISA

そんりさ

Vol.140



グアテマラ・マヤ
戦時下性暴力

「そんりさ」「微笑み」を意味します。レコムは様々な活動を通じて、ラテンアメリカ・カリブの人々と喜びを分かち、共に生きていきたい、彼らの微笑みを私たちの微笑みにしたいと考えています。

- | | | |
|----|---------------------|-------------|
| 01 | グアテマラ・戦時下性暴力講演ツアー | ……太田裕之 |
| 12 | メキシコ紀行 | ……山本昭代 |
| 15 | CLIJALの活動から「パペルピカド」 | ……網野真木子 |
| 17 | ラ米百景「座頭市」は革命キューバの英雄 | ……伊高浩昭 |
| 18 | ケチュアのエッセー 母なる大地の怒り | ……栗原重太 |
| 19 | 音楽三昧♪「ニコメデスとクマナナ」 | ……水口良樹 |
| 21 | 食巡り「鶏とセロリのトマトソース」 | ……ミゲル・アクーニャ |
| 22 | ニュースクリップ | ……サザエ |

2012年12月8日 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク (RECOM) 発行

グアテマラ戦時下性暴力 スピーキングツアー2012 「沈黙を破って」

アナ・アリシア・ラミレス・ポップさん講演報告
(*京都での講演を中心に、まとめ・太田裕之)

<通訳・新川志保子さんより背景説明>

アリシアさんのお話を聞いていただく前に、グアテマラで取り組まれている性暴力プロジェクトと裁判について少し説明します。グアテマラは1200万~1300万人の人口の過半数が先住民のマヤの人々ですが、スペイン人の侵略以降、差別され搾取されてきました。20世紀に入り土地問題を中心に改革しようとする政権が生まれましたが、大きな影響力を持つ米国の利害に触れ、改革を心よく思わない米政府の後押しで1954年に軍事クーデターが勃発。これに対し改革を続けようとする勢力が反政府ゲリラとなり、1960年から96年まで36年にわたる長い内戦となりました。特に80~82年に物凄い暴力が吹き荒れます。ゲリラの勢力拡大に危機感を持った政府軍が、ゲリラを支援している人々ごと殺す焦土作戦を主にマヤの農村部で展開。20万人以上が殺されたり行方不明にされ、440以上の村が焼き払われて地図上から無くなりました。そして、軍に襲われたところではほとんどと言っていいほど兵士達によ

る女性への性暴力が行われました。グアテマラだけではないですが、性暴力の被害はなかなか表に出せません。多くの被害女性が沈黙を強いられ、苦しみ続けてきました。内戦は1996年に終わり、直前にカトリック教会が内戦中の人権侵害の実態を報告、和平直後にも国連の真相究明委員会の報告書が出て、いずれも内戦中の人権侵害の数々を指摘しています。性暴力にも触れてはいますが、自分に起こった被害を話せる女性が少なかったため、その実態や被害者数がよく分からない状態でした。この問題をなんとかしようと、性暴力、ジェンダーの問題で活動する女性たちが現れます。そうした中、2000年に東京で元「慰安婦」のアジアの女性たちを招いて日本軍による性奴隷制の問題を追及する女性国際戦犯法廷が開かれました。その際、世界各地の紛争地からも被害女性たちを招いて実態を知る国際公聴会も開かれ、グアテマラからもヨランダ・アギラルさんという女性が参加。内戦中に政治的活動をしたとして秘密警察に捕らえられ、数週間にわたって凄まじい拷問と強かんを受けた経験を話しました。彼女は「性暴力の被害者はとても苦しんできたけれども、被害者の立場だけにとどまってはいけない」とも語りました。女性国際戦犯法廷を傍聴してアジアの女性たちの証言にとっても強い印象を受け、彼女たちのエネルギー、戦犯法廷を開いた人たちの努力を実感し、グアテマラに帰ってから

ぜひそのような活動をしたいと決心したのです。そして仲間を募って始めたことが、アリシアさんが働いているプロジェクトにつながっていきました。

グアテマラの内戦の被害者のほとんどはマヤの人々で、性暴力を受けたのも大部分がマヤ女性です。農村部のマヤの人々はスペイン語を話さない人が多く、同じマヤ系でも23の異なる言語があり、似ていると



ころもありますが、お互に通じない言葉もあります。そんな壁もある中でしたが、3つの地域から60人の女性が参加してプロジェクトは始まりました。女性たちの状況を知ると、やはり被害を受けて苦しみ続け、心の傷が相当に深いことが分かります。メンタルヘルスも必要となり、その活動組織と、女性の権利のための活動組織が一緒になって運営。それがどんどん広がり、2010年に戦時下性暴力に関する民衆法廷をグアテマラで開催するに至りました。民衆法廷は成功し、力を得た女性たちが加害者の処罰を求めたいと希望。グアテマラは治安も悪くてまだまだ危険な状況ですが、15人の女性たちによる集団訴訟が始まるどころです。

そして、彼女たちに寄り添っているのがアリシアさんで、今年、36歳のマヤ女性です。自身も4歳の時に村が軍に襲われ、命からがら家族と逃げた経験があります。屍を乗り越えて走ったのを覚えているそうです。着の身着のまま山中を逃げ、家族と離れた生活も強いられました。その後、成長して学校に通えるようになりましたが、12歳までスペイン語は話せなかったそうです。やがて真相究明活動に参加するようになり、自分や家族、村、マヤの人々に起こったことを学び、理解を深める中で戦時下性暴力のサバイバー女性たちの集まりにも参加するようになりました。現在はメンタルヘルスの立場から女性たちをサポートする団体「社会心理行動と共同体研究グループ (ECAP)」のファシリテーターとして活動しています。彼女はマヤ語とスペイン語を話せるので被害女性たちの信頼も得て、状況も良くわかっています。裁判でも公式通訳として重要な役割を果たすアリシアさんの話を聞きましょう。

<アリシアさん講演>

どうもありがとうございます。最初に説明がありましたので、私たちの活動について説明したいと思います。まず、皆さんと分かち合いたいののはマヤの儀式です。本当に儀式をしたいのですが、その用意をグアテマラから持ってくる訳にもいかず、今日は写真でお見せします。私たちは重要なことをする時、成功を祈る時などに祭壇を作って儀式を行います。東西南北の方向やマヤの世界観が盛り込まれ、色にも意味があります。そのう



ち緑は私たちがたどるべき道を表しています。黄色は家族のつながりや団結、連帯を意味します。そんな心でこれからお話したいと思います。

グアテマラでは先住民族のほとんどが社会から排除された立場に置かれていますが、中でも女性性は貧しさも加わって3重の抑圧に苦しみ、声を上げるのは大変なことです。さきほどの説明にもあったヨランダ・アギラルさんの日本での経験をきっかけに、グアテマラでも02年から私たちの活動が始まりました。内戦中、とくに暴力のひどかった時代に被害を受けた女性たち、心の傷を吐き出せないで苦しんできた女性たちを探してプロジェクトを始めました。女性たちに集ってもらい、自分たちの経験を話してもらおうのですが、被害があまりに辛くて、話そうとすると気を失ったり、泣き出したりして話ができない人が多かったです。その一人、マルガリータさんは被害を受けた時は24歳でした。すでに結婚していて3人の子どもがいて4人目がお腹にいたそうです。村に軍がやってきて夫が拉致され、彼は今もどこにいるのか、あるいはどこに埋められているのかも分からない状況です。彼女自身も軍の駐屯地に連れて行かれ、6カ月間、性奴隷にされました。毎

日、兵士たちの食事を作り、洗濯をさせられた上、每晚4～5人に強かんされ続けました。性奴隷の立場から逃れる唯一の手段は誰か男性を見つけて再婚することでした。軍の駐屯地に連れ込まれるのは12～14歳くらいの未婚女性か、夫を殺された女性で、これは女性を所有物とする考え方とつながると思いますが、誰かと結婚すると性奴隷から免れました。彼女もそのために再婚したそうですが、炊事洗濯の方は6年間強いられました。マルガリータさんだけではなく、多くの女性たちがすさまじい経験をしています。

そんな女性たちに同伴しながらの活動で、「社会心理行動と共同体研究グループ (ECAP)」と、女性の権利・ジェンダー問題について活動している「グアテマラ全国女性連合 (UNAMG)」という二つの団体の共同プロジェクトとして始まりました。

グアテマラには23の言語があります。プロジェクトには大きく分けて三つの地域から女性たちが参加しています。ウエウエテナンゴ県からはマム語、カンホバル語、チュフ語、それと混血の女性たち。チマルテナンゴ県からはカクチケル語の女性たち。イサバル県とアルタ・ベラパス県からケクチ語の女性たちです。現在は計110人です。また、プロジェクトは内戦中の性暴力に関して始まりましたが、2007年ごろから鉱山やプランテーション開発で地域住民の強制立ち退きが行われる際、軍兵士や警察官による性暴力も起きており、その被害女性たちへのアテンドも08年ごろから始めています。

私はECAPでメンタルヘルスの活動をしています。メンタルヘルスの基礎を学んだプロモーターの女性、マヤ女性で言葉が同じ人たち、心理学を学んで心の傷をケアする方法を身につけた女性たちでチームを作っています。まず同じ地域に住む女性たちでグループを作り、相互に信頼を築いて連帯し、互いに秘密を守ることを基本にしています。その中で女性たちが自分の身に起こったことを、恐怖を克服し沈黙を破って話し出すというプロセスを経るのです。プロジェクトの名前も「沈黙を破る女性たち」です。性暴力は内面の深いところに加えられる暴力で傷が深いのですが、まずグループの中で一緒に話し合い、泣いたり笑ったりできるようになることを繰り返して関係



を深めてきました。04年からは年に1回、すべての女性が一堂に会する場を持つようにしています。三つの異なる地域の女性たちがそれぞれの経験を共有し、性暴力の共通性を理解して知識を深めることで、自らの被害を客観的にとらえられるようになりました。こういう活動を通じて、女性たちが自分に自信を持つ、自分に価値を見出し、自分を信頼する過程が始まります。

彼女たちには起こったことを話してもらうことをけっして強制はしません。自分で納得して話ができるまで待つ、そういう状況を作っていきます。そのためには心理学的な方法論が非常に重要です。こういうセッションを続けることで、女性たちに加えられた物理的な害、心理的な害、そして社会的な害に、女性たち自身が気づいていくのです。社会的な害とは、軍による強かんは人々が集まる公共の場で行われたことが多く、そういう経験は女性たちには決定的な傷となり、以来、悪夢が続く状況だったわけです。その意味で社会的被害を認識するのはとても重要です。

また、そうした女性たちへのケアの方法論としてアートセラピーを使いました。例えば絵を描いたり、紙粘土で何かを作ることを通じて自分たちの言いたいことを表現するやり方です。エルサルバドルにあるアートスクールの支援を受け、自分に起こったこと、自分がどう感じているかを紙粘土で形に表すエクササイズや、壁画作りもしました。こうしたアートセラピーを5年間続けたのですが、社会心理学的な観点からも非常に役に立ちました。お見せしているカラフルな写真は08年に共同で製作した壁画です。サイズは縦2メートル、横6メートルくらいで、1週間かけて描き上げました。女性たちに起こったこと、恐怖の経験

を表現しています。兵士たちがいて、通るところ、見つけるものをすべて破壊し、家が焼かれ、家畜が殺され、人々が殺されて、埋められた秘密墓地が表現されています。

これを作り終えてから、女性たちが学生たちに紹介したり、そこに込めた意味などを話す機会が何回かありました。30年間話せなかった沈黙を破り、しかも自分を表現し説明するまでに至ったのです。女性たちはとてもエンパワーメントされ、民衆法廷を行いたいという希望が生まれました。女性たちが一番強く希望したのは、自分たちに起きた暴力が他のどんな女性にも起こらないために何かしなければ、自分たちに起きた出来事を社会全体に知ってもらい、二度と繰り返させないことをアピールしたいということでした。

その準備期間中、女性たちが住む地域のリーダーたちに人権意識や、過去に起こったことをどう解釈するかを広める意識化キャンペーンにも取り組みました。また、民主法廷とは言え法廷ですので、女性の弁護士組織「世界を変える女性たち(MTM)」も運営に関わるようになりました。民衆法廷は2010年に実現しましたが、当初からの2団体にMTMが加わって開催し、今もこの3団体でプロジェクトを運営しています。月に1、2回、チームと被害女性たちで集まり、いろいろなことを話し合っています。

また、09年にはこのプロジェクトが日本で「やより賞」を受賞しました。2000年の女性国際戦犯法廷開催に大きな役割を果たしたジャーナリストの松井やよりさんが亡くなられ、その遺志を継ぐために創設された女性人権賞です。その副賞が2000年の戦犯法廷のビデオで、それを持ち帰って女性たちと見ました。グアテマラでの民衆法廷のちょっと前で、とても参考になり、力ももらいました。コミュニティーのリーダーの意識化をする上でも役立ちました。

10年に開いた民衆法廷では4人の判事役をコロンビア、カナダ、ペルー、日本から招き、そのうちの一人が今日、通訳をしてくれている新川さんでした。レコムから支援をしているということ、日本との関わりもあるのでお願いしました。

私は被害女性への付き添いに加え、ケクチ語とスペイン語の同時通訳も務めました。グアテマラでは身元がわかると危険なことが多く、法廷では女性たちは顔を隠して証言しました。全員が証言



するのは時間的に難しかったので、各地域から代表を選びました。また、3団体の他に、グアテマラのマヤ女性の会である「連れ合いを奪われた女性たちの会(コナビグア)」も共催団体とし参加してくれました。

この民衆法廷は大成功でした。大勢の人が傍聴に来て、国際社会からも大きなプレゼンスがありました。各国の大使や、国連の女性関係の機関などの人も出席。各国からの支援団体の存在もありました。参加した女性たちにとってそれを見ることは本当に重要で、女性たちの勇気を讃える人々の気持ちが大きな励ましとなりました。私は同じケクチ語地域からの女性たちをアテンドしていたのですが、民衆法廷が終わった翌日にみんなでバスを仕立てて帰る時、女性たちは「ついに自分たちのことを話すことができた」ととても喜んでいました。多くの人の励ましがあったことも嬉しくて、歌を歌いながら帰りました。象徴的なものではあっても、正義を回復したという達成感、満足感にあふれていました。

内戦集結後、真相究明委員会の報告などが出ましたが、そこには性暴力は本当にわずかししか書かれていません。実際に被害を受けた女性たちはたくさんいるのにもかかわらず、社会的な刻印を押され、話せないでいる人がまだまだいるのです。

民衆法廷の後、私たちはさらに活動を続け、女性たちが住む地域、コミュニティーで13~19歳の子ども・若者を対象に意識化キャンペーンを行いました。子どもたちは過去に何が起こったのか分かっていないので、自分たちの村に何が起こったのか、あるいは性暴力の問題について、もっとよく理解し考えてもらうのです。さらにコミュニティーの中で委員会など重要な役割につく男性

たちを対象に、性暴力や人権一般について意識を持ってもらうキャンペーンも行いました。学校の教師たちにも行っています。なるべく私たちの活動の後ろ盾になってもらえるようするために、こういう活動を続けることで、女性たちだけでなく私たちすべてにとってより良い社会が作られていくとも思います。

一方、民衆法廷が終わった後、プロジェクトに参加している110人のうち15人は「社会がもっと自分たちに起こったことを知るべきだ」と考え続けました。性奴隷にされたこと、それが自分たちの責任ではなかったということ、責任があるのは軍の方だということをはっきりさせるため、さらに進みたいというのです。それで刑事裁判を始めることになり、11年にこの15人が共同告訴人として検察に告訴を行いました。民衆法廷を通じて培ってきた共同体のネットワーク、意識化キャンペーンで理解を得られた人たちの協力などを得ながら準備を進め、今年の9月24日からの週に、重大犯罪を扱うハイリスク事件裁判所でこの15人が、判事、裁判官、弁護士を前に、自分たちに起こったことを証言しました。通訳が3人つき、私はその一人でした。証言には他に4人の男性も加わりました。彼女たちと同じ村で拷問を受けながら生き延び、駐屯地で女性たちを目撃していた

のです。マスメディアもかなりやってきて話題になりました。

私はそれまで何年も女性たちに寄り添う中で、被害の内容やその後の状況を十分に知ってはいましたが、そういう場で改めて証言を通訳すると、その内容のひどさに本当に辛い思いをしました。例えば証言した女性の一人は軍の弾圧を受けて着の身着のまま山に逃げこまなければいけなかったのですが、小さな子どもを3人、4人連れて、山の中で食べるものが何もなく、子どもは一人また一人と餓死しました。その子どもたちを埋めなければならなかったという証言は、通訳している私たちにも本当に辛いものでした。

けれども、証言が終わって女性たちが家に戻り、その安否確認のため3日後に私たちが会いに行くと、この証言をした女性は「これでもういつ死んでもいい、自分に起こったことを話すことができたので、いつ死んでもいい」と話してくれました。女性たちは「沈黙を破ることができた」「とても満足している」と言ってくれました。

他の地域からこのプロジェクトに参加している女性たち、例えばウエウエテナンゴ県のママやチュフの女性たちも同じような経験をしています。トラウマがあまりにひどくて家から出られない、閉じこもったままの生活を続けていた人もい

ましたが、活動に参加して少しずつ力をつけ、家から出られるようになり、コミュニティーの中のいろんな活動にもだんだんと参加するようになっていきます。このプロジェクトの目的は、女性たちが自分の人生の主人公になること、人間として、女性として自分に価値があるのだと自分自身で認識していくことなので、こういう成果が上がっていることはとても良いと思います。

この15人の女性たちは、性暴力を受けたのは30年ぐらい前ですから、現在は55歳ぐらいから70代です。その中の一人、マグダレーナ・ポップさんは今年53歳で、



昨年、子宮がんがあることが分かりました。かなり進行していて、手術をしましたが、また再発しています。こうした手術費や同行費はレコムなどの国際的な支援で賄うことができました。そのマグダレーナさんは自分が最初に証言したいと望みました。いつ死ぬか分からないからです。そして最初に証言した後、「もうこれですべて安心して死ねる」と話しました。

一方、最近もカナダやドイツなどの国際企業による鉱山開発や、サトウキビ、アフリカ椰子などのプランテーションを作ることに伴う先住民族の強制立ち退きに伴う性暴力も起きています。先ほども述べたように 19 人の女性たちをアテンドしていますが、みんな 20 代、22～28 歳です。こうした被害者がまだまだ出ているわけで、性暴力の悪循環をなんとか断ち切れねばなりません。今のグアテマラの大統領は内戦中に弾圧作戦を指揮した元将軍です。軍事政権ではありませんが、軍人が大統領になっていて、かなり難しい状況です。それでも、やはり被害者が沈黙を破って社会に訴え、二度と繰り返されない社会を築くために一緒に活動していかなければならないと思います。

最後に、マグダレーナさんの言葉で締めくくりたいと思います。「自分はいま、種を撒いています。その収穫を自分は見届けることはできないけれども、若い世代、これから生まれてくる子ども達、私たちに続くどんな女性たちも今後、私たちと同じような苦しみを味わわないために、私はいま種を撒いています」。裁判はこれから始まります。女性たちの証言が終わったところで、今後、裁判所によって被告が特定され、逮捕令状が出て、逮捕がなされて裁判が進んでいくことを待っています。まだまだ予断は許さず、15 人の女性たち、裁判に関わる人々の安全の確保も今後の課題ですが、3 団体で連携し、なんとかやっていきたいと思っています。

私が日本に来られたのは日本の支援グループのおかげ、皆さんのように私の話を聴いてくれる



人がいるからです。今後も私たちの裁判を見守り、支援していただきたいと思います。私は日本に来て「ありがとう」という日本語を覚えました。グアテマラに帰ったら、この美しい言葉を仲間に伝え、分かち合いたいと思います。みなさんとはケクチ語の感謝の言葉を分かち合いましょう。「バンティオッシュ」。本当にありがとうございます。

<質疑・応答>

Q: 被害女性に最初に会う時に大事にしていることは？

A: まず自分のことを話し、知ってもらいます。何の目的でこういうことをしているのか、自分にどう関わるのか。時間をかけ、女性たちが話す気になるかどうかを待ちます。重要なのは、どんなに辛い話を聴いても自分は一緒に泣かないこと。女性が泣き出しても、泣き終わるのをじっと待ちます。聴いた自分も辛い思いをしますが、それを話出すのは別の場所にします。相手の話を本当に一生懸命聴いているというのを分かってもらうこと、自分にとっても大変重要なのだと感じてもらおうことです。

Q: 被害女性に、自らの人権を意識してもらう方法は？

A: まず、性暴力によりどういう影響を受けたか

を話し合います。身体的影響、心理的影響、社会的影響について。理論から入るのではなく、生活に根ざしてどういうことが権利なのか、満足すること、不満なこと、どうしてそれが起きるのか、暴力の前後で何が変わったかなどを話し合いながら、自分たちの権利をだんだん認識してもらっています。

Q: 長年の活動の中でマヤの智慧が役立ったことは？ 活動の中で最も感動したことは？ くじけそうになった時にはどう乗り越えてきた？

A: 私の最初の数年の活動は、内戦中に家族を殺された遺族が、遺体を遺棄された秘密墓地を探して発掘し、埋葬することの手伝いでした。遺体はどこにあるか分かりますようにと、マヤの儀式をして創造主に祈るのですが、そういうマヤの習慣はとても重要です。祖母からがよく「人はみな役割を持って生まれてくる。そしてそのためのエネルギーを持って生まれてくる」と聞かされてきました。本当にその通りだと思います。私もこの活動をしていて成長を続けたいと思っています。

最も嬉しいことは、やはり勇気ある女性たちに寄り添って一緒に活動を続けていられることだと思います。こういう重要なテーマ、性暴力の問題で活動し、女性たちから力をもらっています。一方、苦しかったというより、よく欲求不満に陥るのは、同じ暴力の被害者でも「何をやっても変わらない」「神の手に委ねるしかない」「何も出来ない、変わりっこない」とあきらめている人が多いことです。でも、このプロジェクトに参加する勇気を持つ女性たちと接することで大きなエネルギーをもらいます。

Q: グアテマラの軍隊は徴兵制？ 誰が兵士となる？

A: 強制徴兵に反対する努力が実って、現在は志

願制となっています。内戦中は兵役があり、軍がマヤの村にきて有無を言わず若者を引っ張っていきました。13歳、14歳といった少年も連れて行かれ、マヤの若者が殺人マシンに仕立て上げられたのです。しかも軍はとても戦略的で巧妙でした。例えばカクチケルの若者をケクチ語地域に、ケクチの若者をマム語の地域に送ったのです。そうやってマヤの兵士が同じマヤの人々を殺戮させられたわけです。軍高官、司令官レベルには先住民はいません。

Q: 加害者と被害者が同じ村（近隣）に住むとはどのような状況なのでしょう。村の集まりに両方とも参加したりするのでしょうか。挨拶や話をするのは？

A: 加害者は当時の村の中で軍から大きな権力を委託された軍コミッショナーで、誰であるかを村の誰もが知っています。やはりいつも緊張感があります。加害者と被害者が話をするのは普通ありません。村の全員が集まるような催しがあれば、被害者も加害者も参加しますが、こちら側と向こう側というように離れますし、言葉も交わしません。

Q: 村の中に加害男性がいる状況下で被害女性を守る工夫は？ 村のリーダーの反応は？ グアテマラは男性優位主義と聞かす、男性の反応は？

A: 多くの村ではいまだに当時の加害者が近くで暮らしています。80年代には軍の他に自警団という形で村の男性が組み込まれ軍の手先となって人権侵害を行いました。また、軍コミッショナーだった人もいます。彼らがまだ近隣にいる訳で、だからこそ私たちが作り上げている安全のネットワークが非常に重要です。特に村のリーダーたちの協力が欠かせません。グアテマラでは農村部で一番小さな自治体の単位は郡ですが、私たちの活動している郡には16の村があります。最初に郡の長の補佐と交渉し、各リーダー、土地問題や水処理、学校、教会など各部門の代表と集まりを持ちます。だいたい25人の男性が参加します。最初から性暴力被害のことを話すことはありません。まず、人権と心のケアの面での活動の必要性を話します。内戦中、みなが苦しんできた被害の話から始め、なぜ内戦が起こったか、和平合意の内容、その何が達成され、何が達成されないままかを話し合います。彼らも自分たちに関わる問題なので熱心に参加しま



す。彼ら自身が内戦の被害者なのです。こうして彼らの興味を引き出した上で、内戦の後遺症で今も一番苦しんでいるのは誰なのかを問うのです。彼ら自身に考え、気づいてもらうようにしています。

そして、そうしたネットワークが女性たちを守る役割を果たします。例えば、裁判が始まるに当たり、女性たちや家族への脅迫、あるいは実際に何かあった場合にすぐ対応できるよう、共同体・村の支援者と、プロジェクトを運営している3団体で常に話し合っていますし、必要があればすぐに安全なところに連れ出しておく用意もあります。地域のリーダー2人からすでに強い協力を得ていて、さりげなく女性たちを見守ってくれ、何かあったら連絡をもらうことになっています。私たちが女性たちと集まりを持つほか、電話などで毎日のように安否を確認していて、何かあった時に動ける態勢は取っています。

また、内戦が終わってしばらく経ち、状況も変わってきています。グアテマラはいまだに非常に暴力的な社会で、裁判を続けるのは非常に難しい状況ではありますが、同時に国際社会の目もあるし、国内外の連携・協力のネットワークを広げることで、危険はだんだん減っていくのではないかと思います。つい先月も民営化による電気代高騰に反対するデモ行進が地方都市であり、極めて平和的なデモだったのに軍と警察が出動、発砲して6人が殺されました。この時は国内外から非難が巻き起こり、大統領が謝罪しました。政府もそれに学んで、今後はそんなに馬鹿なことをしないのではと期待しています。

そして、女性たちも「もう怖くない」と言っています。元自警団や軍コミッショナーの人たちにやられたことは覚えています、その人たちの中にも強制されてやらされた人もいたのだという事情も理解してきています。

私たち3人の通訳にも何も起きていません。運営している3団体には脅迫メールなどが来てはいますが、恐怖にとらわれては何もできなくなるので、安全を図りつつ裁判は進めていかなければと思っています。

さらに強調したいのは若者たちの意識化の活動を続けていることで、この努力が今後、女性たちの権利を守り性暴力を防止していく上で非常に重要だと思います。たくさんの仲間、ネットワークを作り、何かあった時には対応したいと思っています。

最後に、一般的な男性の反応ですが、グアテマラはまだまだ男性優位的な社会で、性暴力への意識はひどいです。強かんされた女性は沈黙を強いられ、恥ずかしい存在として社会から見られます。女性たちも被害に遭うと、「自分のカラダが汚れている」と、なるべく知られないようにするのが一般的です。知られた場合には加害者ではなく被害者が攻撃されます。女性は「強かんされないように」と言われるのに、男性は「強かんしないように」と教えられないのです。そういう事件が起きると、「女性の方が誘ったんだろう」とか、女性の責任とされてしまいます。社会に非常に深く根付いた価値観となっているのです。

戦時下性暴力の裁判で9月に女性たちが証言した際のマスメディアの反応は、彼女たちへの支援と攻撃が半々でした。インターネットでのコメントも半分は彼女たちへの支援で、「もう30年も経ったのだから彼女らへの凄まじい暴力が世の中に知られるべきだ」という声。残り半分は「女性たちは金目当てだろう」とか、「軍は祖国防衛のために戦ったのになぜ攻撃されるのか」という中傷でした。証言後、私たちがチームで安否確認をしに女性たちを訪問した際には、マスコミにも報じられたので村の中で噂はあったみたいですが、女性たちへの直接の脅迫などはありませんでした。ただ、残念ながら社会全体として性暴力は被害者の女性が責められることが根強く、それを変えるのは難しいです。



＜「旧日本軍性奴隷問題の解決を求める全国同時企画・京都実行委」の浅井桐子さんより感想＞

グアテマラでこんなにも組織的で継続的に被害女性たちにケアをされていることを知って感激しました。本当に困難な状況の中でされてきたと思います。私たちも04年から日本軍性奴隷の問題で被害女性を京都に招いてお話を聴くところから活動をしてきましたが、性奴隷問題でこれだけ組織的にされている地域は韓国、台湾、フィリピンくらいで、グアテマラでの活動に本当に敬意を表したいです。

私たちがグアテマラとつながったきっかけは、レコムの京都での中心的な安藤栄里子さんが、私たちが証言集会を始めた時に「ぜひ一緒にやらないか」と声をかけてくれたことでした。彼女は闘病を経て今年4月に亡くなりましたが、資料集の2ページ目に彼女が書いた文章があります。私たちの証言集会にも参加してくれ、09年に韓国のカン・イルチュルさんという女性を招いた時に発言もしてくれました。

今年は11月3日に台湾の被害女性、ウ・シュウメイさんが96歳で亡くなりました。アリシアさんの話で「被害女性たちが勇気を持ってカミングアウトし活動していくのに触れてすごく勇気もらった」と話されたのが印象的でした。私もそうです。性暴力は大変な話で、正面から向き合うことを避けてしまうことがある。でも、実際に被害女性と接してみると違う。辛い話だけではなく、それを超えて行こうとする勇気と愛情にあふれ、人間の尊厳にあふれた存在に接するのです。ウ・シュウメイさんも本当に笑顔が素敵な女性ですが、彼女も最初に名乗り出た時にはいつもうつむいたままの暗い表情だったと聞きました。でも、台湾でも同じようなセラピーを支援グループがたくさん行い、それを通じて本当に積極的になってきたそうです。京都に来られた時も「私は今が一番幸せ」と語ってくれました。そういう人達が裁判を起こしたり政府に訴えたりするのは、自分たちは被害者で、誰が悪かったのかをきちっとして欲しいということ。「悪かったのは軍である」と世間に明らかになることが被害者にとって一番の救いであり、それを求めて勇気をもって闘う人の姿は尊厳にあふれることだと実感しました。辛い話だけでなく、勇気をもって立ち上がった人達の尊厳を、私たちが次の世代に伝えていかねば

ならないと思います。「自分は種をまいている。次の時代に同じような被害者を生み出さないためだ」との言葉が紹介されましたが、日本軍の性奴隷被害者のおばあさんたちも同じことを言っています。それを聴いた私たちは、一人一人、どんな形でも、自分の子どもや家族、友達に伝えていく。二度と起こらないために協力していく必要があると思います。ありがとうございました。

＜レコム会員、嘉村早希子さんより呼び掛け＞

浅井さんからも安藤栄里子さんの話がありましたが、3年前に同じような講演会を京都で開いた時、彼女との打ち合わせの中で、「00年に来日したヨランダさんがアジアのおばあさんたちからいろいろな智慧や勇気をもって、10年後にグアテマラで民衆法廷を開くなんて、本当に世代を超えて、国境を越えて、すごいつながりだよ」と2人で話したことを思い出しています。私たちのレコムは小さなNGOですが、今後もアリシアさんたちの活動のこれからを見守っていきたいし、私個人としても自分の2歳の娘に、勇気ある女性たちのことを語り継いでいきたいと思っています。レコムでは今後もグアテマラの女性たちのことを継続的に会報誌で報告していきますので、購読をお願いしますね。

＜アリシアさん＞

今の話聴いて私もとても感激しています。安藤栄里子さんのことは京都に来る時に聞いていましたし、ここでも改めて聞きました。実際に会うことはできませんでしたが、彼女はここにいま一緒にいるように思えます。きっと皆さんがここに集うことを願っていて、笑ってみているでしょう。

私たちの仲間の1人も09年にがんで亡くなりました。アートセラピーを行っていた時、彼女はこう言いました。「自分はもうすぐいなくなるかも知れないけど、覚えていてね、空からいつもみんなの道の手を見守っているよ」と。栄里子さんにも同じように感謝いたします。私もここでお聞きしたことをグアテマラの仲間に伝えることをお約束します。女性達にとってより良い社会に変えていくために、これから生まれてくる子どもたちのためにも。どうもありがとうございました。

<アンケート用紙への感想から>

★皆さんの勇気に感謝します。誰を責めるつもりではなく、ただ二度と繰り返されてほしくない。20年ほど前、私自身が性暴力を受けたことのある者として切にそう思います (42歳女性)

★静かな話し方が印象的でした。スペイン語が分かれば良かったのと思いました。活動を続けることのできる原動力についてもっと詳しく知りたいです (匿名)

★プロジェクトの活動によって女性たちが人間の尊厳の回復をしていったことに関心を持ちました。裁判の開始と結果を期待します。女性の人権を守る歴史を切り開いておられる活動に経緯を表します (女性)

★スペイン語を間近で聴くのは初めてでしたが、落ち着いた澄んだきれいな発音と感じました。淡々と、そしてしみじみ悟っておられるような印象を受けました。少しでもお手伝いして、少しでも生きやすい世になってほしいと願います。無事で頑張してほしいと思います (65歳女性)

★「あなたの話は聴いている私にとっても大事なのよ」ということを分かってもらうことを大事にしていることに関心を持ちました。話を聴くことは、受動的な行為ではないということに改めて思いました。苦しんでいる人に寄り添い、ともに尊厳のある生き方をされていることに感動しました。ありがとうございました (匿名)

★グアテマラの内戦中の出来ごとに関心を持った。知ることが大事だと思った (匿名)

★被害者と接する時の心構え、姿勢に感銘を受けた。証言する被害者の勇気。裁判についてこれからも知りたい (59歳男性)

<アリシアさんの感想>

何と言っても、行く先々での皆さんのホスピタリティあふれる暖かい受け入れに感動しました。どこでもとても親切にしてもらって、講演会の準備から私の滞在まで、たくさんの方が細かな心配りをしてくれて、感謝の気持ちでいっぱいです。日本に来ることができなんて、まるで夢のようです。私を招待してくれたレコムの皆さん、本当にありがとうございました。私たちの活動はこのように国際的な支援に支えられているのだ、と改めて感じました。日本での経験をグアテマラに帰ってから、プロジェクトの女性たち、仕事の仲間

たちと共有します。皆にとってもとても大きな励ましになると思います。

日本では見るもの聞くもの、すべて目新しく、写真をたくさん撮りました。生活水準の高さ、テクノロジー、物の豊富さにも目を見張りました。カトリックの女学校を見学させてもらいましたが、こんなにすばらしい環境で勉強できるなんて、と感心しました。広島で原爆記念館を訪問したのも忘れることができません。核兵器の恐ろしさを改めて感じました。子どもたちへの被害はあまりにもむごくて、私の国で起こったことも思い出さずに入れませんでした。

<通訳・新川さんより>

アリシアさんは2010年の戦時下性暴力についての民衆法廷の時に知りました。私たち日本からの傍聴団は民衆法廷に参加する女性たちと同じ宿舎に泊まったのです。なので、女性たちの様子だけでなく、通訳として同行しているアリシアさんとアマリアさんの仕事ぶりもかいま見ることができました。法廷の準備の他、言葉の問題があったので、食事やら移動やらのコーディネーターも結局この二人がやらざるをえなく、とても大変そうでした。しかも民衆法廷の同時通訳という重責があり、ケクチ語にない法律用語をどのように訳すか、と二人で話し合っている様子も見ました。本当に精神的に強靱でなければやれない仕事だと思いました。

民衆法廷が終わった後、イサバル県のセプルサルコを訪問することができました。その時はその女性たちが共同訴訟を起こすということはまだ知りませんでした。心理学者のアイデーさん(2009年のやより賞受賞の時に来日)とファミリーテーターであるアリシアさん、アマリアさんというECAPのチームが法廷後の様子を確認するための訪問に同行させてもらったものです。そこで、女性たちの生活の様子だけではなく、チームがどのように仕事をしているかも見ることができました。(その報告は「そんりさ」125号に掲載)そしてここでも改めて、女性たちとチームのメンバーが強い信頼関係で結ばれていなければ成り立たない活動だと、あらためて感じました。

その後グアテマラ視察のおりにはアリシアさん、アマリアさんと会いプロジェクトの進捗などを聞いたりしていました。なので、今年日本で戦

時下性暴力についてのスピーキングツアーを行うことにした時、ぜひアリシアさんを招きたいと思ったのです。そして ECAP に打診したところ快諾してもらい、今回の招聘が実現したものです。

日本にやってきたアリシアさんは、こちらの期待を裏切らないよい仕事してくれました。最初の東京と横浜の講演会では、持ってきたパワーポイントが映せないというハプニングはあったものの、内戦中の性暴力被害のことや、参加女性たちのプロジェクトのこと、どのように女性たちが変わって行ったかなどについて女性たちの言葉を紹介しながら語ってくれました。講演会の内容はすでに紹介しているので、ここでは少し講演会以外のアリシアさんについても少しお話しします。

アリシアさんはとても明るく、何にでも好奇心をもち、よく笑う楽しい女性でした。借りてきたというデジタルカメラをいつも持って、何かにつけ写真を撮っていました。箸を使うのは初めてでしたが、最初から果敢に挑戦、2-3日したらかなり上手に使うようになりました。食事はたいいものは大丈夫で、豆腐やみそ汁もおいしいと楽しんでくれました。うどんやラーメンなども喜んで食べていました。何度か鍋をごちそうになりましたが、食卓で鍋を囲む、というのは珍しかったようで、日本の食事が一番印象に残ったのは鍋だということでした。柿が大好きで、グアテマラでも時期によっては売っているが、僅かで高価なので、なかなか食べられないそうで、日本では10分ぐらいの柿を食べたと喜んでいました。

各地の受け入れの暖かさにも感激しっぱなしでした。東京では浅草観光を楽しみ、京都でも嵐山を観光し、広島では原爆記念館、平和公園、そして宮島観光、札幌ではピリカコタン見学、福岡では太宰府観光など案内してもらいました。温泉も札幌と福岡で入り、露天風呂を楽しみました。新幹線はやはり「すごい！」

こんなふうになんでも見てやろう！とはしゃいでいたアリシアさんですが、さすが講演会の前になると、ピシッと真面目な顔になり、しばらくは黙想して備えていました。戦時下性暴力という重いテーマでしたが、女性たちの声を日本の私たちにしっかり伝えてもらえたと思います。裁判はこれから始まります。日本からもできるだけの支援をして行きたいと思います。

ツアー日程

- 11月10日
日本到着
- 11月11日
東京講演
- 11月12日
横浜講演
- 11月13日
休息 東京見物（浅草など）
- 11月14日
京都に移動、同志社大学での講演
- 11月15日
京都講演
- 11月16日
京都女子大で講演
- 11月17日
従軍慰安婦問題について活動しているグループと交流、広島講演
- 11月18日
広島のカフェテアトロ・アビエルトで講演と交流会
- 11月19日
札幌へ
- 11月20日
北海学園大学
- 11月21日
ピリカコタン訪問、アイヌ協会札幌支部の女性たちと交流、札幌講演会（講演前にアイヌの女性による歌と踊り、ムックリ演奏も）
- 11月22日
福岡へ
- 11月23日
福岡講演会
- 11月24日
久留米へ
- 11月25日
久留米講演会、その後成田へ
- 11月26日
グアテマラへ帰国

メキシコ・ナルコ回廊再訪 (1)

～メキシコシティからシウダー・フアレスへ～

山本 昭代

この夏(2012年8月)、再びメキシコを訪れた。昨年夏はロサンゼルスからティファナに入り、クリアカンに行ってみたが、今回は首都メキシコシティから北へ。クリアカンで見落としていた場所を訪れ、そして世界で1番だか2番目だかに危険といわれる悪名高い国境の都市、シウダー・フアレスに怖いもの見たさで行って見ることにした。

骸骨の聖母

まずは首都・メキシコシティ。ここでなんとかご対面したい、とあちこち歩き回ったのが、この骸骨の聖母、サンタ・ムエルテ。おどろおどろしいガイコツやドクロのモチーフは、不良っぽい少年たちが昔からアクセサリーでぶら下げているし、Tシャツのイラストでもよく使われていたが、最近ではこれが救いの「女神」として人気を集めているというのだ。

サンタ・ムエルテ信仰は昔からあったものだが、ここ10数年の間に急速に信者を増やしている。麻薬戦争に伴う治安の悪化で、「死」があまりに身近になったことと無縁ではないだろう。信者はメキシコだけでなく、インターネットを通じて世界各地に広がっているという。死神信仰は、メキシコでは先スペイン期の信仰にさかのぼることもできる。マヤ・アステカの神々のなかには死を司る神もあり、ドクロは先スペイン期のピラミッドを飾るモチーフのひとつでもある。研究者によると、キューバの西アフリカ起源の民間信仰、サンテリアの影響もあ



るといふ。必ずしも麻薬使用者や犯罪者の神様というわけではないが、メキシコ北部の州では残虐さで知られる「セタス」のグループが建立していたサンタ・ムエルテの廟を軍が破壊したという報道を読んだことがある。

メキシコシティの北にある広大な市場「テピート地区」にこのサンタ・ムエルテの教会があると本で読み、訪ねてみることにした。ちなみに、テピートについては『地球の歩き方』に「犯罪が多いので立ち入らないこと」と書かれているとおおり、観光客が行くところではない。実際にテピートにわざわざ麻薬を買いに来た日本人が逮捕されたなんて話もある。しかし迷路のような通りに商店や露天が業種別にぎっしりと並び、

いつも人でごった返して「アメ横」のような雰囲気だ。

テピートのムエルテたち

ちょっと緊張しながら市場を歩き回り、あちこちで「ムエルテの教会はどこ？」人に尋ねたが、ほとんどの人は胡散臭げな顔で「知らない」という。まじないグッズやムエルテの像を売る店で尋ねると、「あっちの通りを渡ってこっちに行けばいい」と教えられ、その通りに行くと普通のカトリックの教会に着いてしまった。この中に骸骨の聖母が？と首をひねったけれど、教会は門を閉ざしているし、もう日が暮れかかり、周りに人通りもない場所なのであきらめて帰ることにした。

翌日の昼前、露天商たちがようやく店を並べ終えた頃、テピート探検に再チャレンジ。商店のなかにはムエルテのさまざまな絵柄のTシャツを並べた店もあったが、その女主人もそんな場所は知らない、といった。犯罪者御用達の神様だったら、警官に聞くのが一番かも、と思い立ち、街角に立っていたちょっと怖い顔の警官に声をかけてみた。すると警官よりその横にいた入れ墨のいかにも売人風のおんちゃんがすぐに答えて、近くに2か所あるよ、と親切に教えてくれた。

そのとおりに歩いて、やっとたどり着いた。前日に来たカトリック教会のからほんの50メートルほど先で、普通の小さな民家の1階を改造したようなつくりだった。私が訪れた日は、その2日後から5日連続で催されるお祭りのために壁にペンキを塗る作業の最中。高さ2メートルあまりの長身のムエルテ像も、普段はドレスを着ているらしいが、この日は白い地のままの姿だっ

た。平日の昼間にもかかわらず、お参りに訪れる人はぼつぼつといて、像の前につらした鐘を鳴らし（日本のお寺か神社みたい？）、ひざまずいて祈りをささげ、ろうそくに灯をともして奉納していつていた。そんな様子を眺めていると、教会の管理人をしている男性が、祭りのプログラムを書いたチラシを渡してくれた。洗礼式から堅信式、聖体拝受、結婚式などカトリックと同じような儀礼が行われるほか、受刑者や病人のためのミサが行われる日もある。カトリックとは別の宗教団体としてすでに登録されているそうだが、儀礼の内容はカトリックとよく似ている。

サンタ・ムエルテは、ガイコツなので女か男か見た目ではわからないが、スペイン語の「死(muerte)」が女性名詞なので女性ということらしい。白いお顔はかなり凄味があって、個人的には苦手だ。それでもカラフルなドレスを着ていたり、ドレスとコーディネートしたベールやかつらや帽子をかぶったりもしていて、「ありゃ、こちらのムエルテちゃんはおしゃれー」なんて、見慣れてくるとだんだんかわゆく見えてくる。

その教会から1ブロックほどの距離のところ、別のムエルテの教会があった。同じように民家の1階のガレージを改装したような場所で、同じくらいの大きさの像が祀られていた。教会は色とりどりの生花で飾られ、店番(?)の若い女性と話している間にも、近所の人がろうそくを買いに来た。日々の平安のために毎日ムエルテの祭壇にろうそくをともす習慣のようだ。話だけ聞くのも悪いと思い、布製のペンダントを買うと、「幸運のためよ」といって、品物を入れたビニール袋と釣銭にいい香りのコロンをひと吹きしてくれた。

街角のムエルテたち

香水の効能なのか、ムエルテ像に2つ出会うと、それが呼び水になったかのように、同じ日にさらにムエルテに出会ってしまった。帰り道、メキシコシティの中心地・ソカロ周辺に広がる歴史地区の露店街を歩いていると、賑やかな通りの角に、紫の上品なドレスを着たムエルテ像が立っているのが目に入った。像の高さは1メートル余り、台の上に立って、通りを行き来する車や人々を見下ろしている。ムエルテの下を忙しげに歩く人々は見慣れているのか意にも介さない様子だが、なかには立ち止まって小声で祈りの言葉を捧げ、賽銭箱に小銭を入れていく人もいた。

さらに別の歩行者専用の通りでは、黄色いドレスを着て黄色いりんごを持ったムエルテに出くわした。通りの反対側には、サン・フダス・タデオの像がムエルテと向き合って立っていた。これは「タダイと呼ばれるユダ」で、イエス・キリストを裏切ったユダと同じ名前だったために長い間無視されてきた聖人で、困難に陥った人の守護神だそうで、メキシコの庶民の間で人気の高い聖人だ。そばで駄菓子を売っていた若者にたずねると、道端の像は毎日運んできて据え付け、夜には撤収していくのだそうだ。

空港に行く際に乗ったタクシーにムエルテの像が飾ってあったので、運転手に信仰しているのかと尋ねてみた。彼は8年前に病気や借金で苦しんでいた時から信じるようになり、ミサに行くようになった、それ



(メキシコシティ歴史地区の露店街にある紫のドレスのムエルテ像)

以来仕事も順調で、なんとかやってきている、ムエルテのおかげだ、と話してくれた。信者には、やはり警官や麻薬の売人が多いそうだ。ちなみにその運転手さんの家では、息子の一人はムエルテの信者だが、奥さんはカトリックの教会に行っている。自分自身もカトリックの信仰を捨てたわけではなく、クリスマスと新年には家族と教会に行くのだ、という話だった。首都にはテピートのほかにも何か所かあり、最近とくに増えてきているという。

サンタ・ムエルテについて詳しく知りたい方は、『骸骨の聖母 サンタ・ムエルテ—現在メキシコのスピリチュアル・アート』(加藤 薫)をご参照ください。

CLIJALの活動から 図書展をもちあげたパペルピカド

網野真木子

前号のニュースレターで、日本ラテンアメリカ子どもと本の会（CLIJAL）について、結成の経緯やこれまでの歩みをご紹介しました。昨年12月に鶴見で開催した図書展「開いてよう！見てみよう！子どもの本でラテンアメリカめぐり展」は、私たちにとっては初めての大きなイベントでしたが、今回は、その会場をいろどり、脇役として図書展をもちあげたパペルピカド papel picadoについて、すこしお話したいと思います。

絵本の中のパペルピカド

メキシコの切り紙パペルピカドは、お祭りやパーティで飾られたり、土産品として売られていますから、メキシコを訪れた人なら色とりどりの万国旗のようなそれを、かならず目にするのではないのでしょうか。じつは絵本の中にもパペルピカドを見つけることができます。図書展で展示した『ポインセチアはまほうの花』と『クリスマスまであと九日』の2冊はメキシコを舞台にした絵本で、前者の挿画には印象的に、後者ではさりげなく、パペルピカドが描きこまれています。

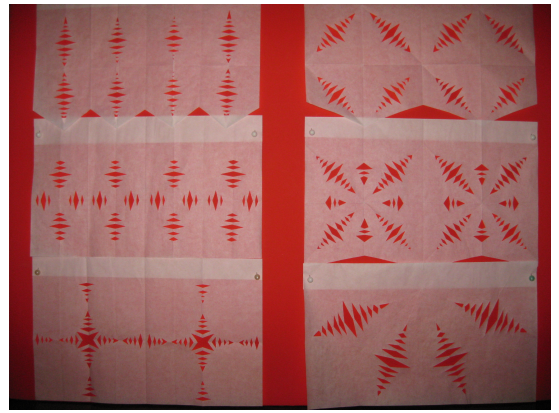
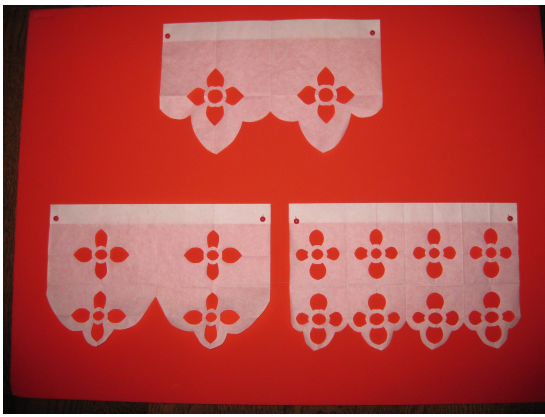
まずはストーリーをご紹介します。『ポインセチアはまほうの花』の主人公の女の子は、クリスマスイブを悲しい気持ちで迎えようとしています。父親が仕事をなくし、その年はイエスさまへのおくりものを用意することができないのです。教会にやってきた彼女に石像の天使がささやきます、傍らにある草の葉をもっていきなさい、と。緑の葉をかかえた彼女が祭壇へ近づくと、それはいつのまにか燃えるような赤い花束となり、少女は喜びにあふれてこのおくりものをささげました。真心の尊さを伝える奇跡の物語です。幼少期にたびたびメキシコを訪れた米国人の作者がこの言い伝えに出会い、アルゼンチン人のイラストレーターと美しい絵本に仕上げました。一方、『ク



リスマスまであと九日』は、幼い少女セノが、やってくるポサダ（クリスマス前9日間の伝統行事。マリアとヨセフのポサダ宿屋さがしに見立てた行列とパーティを行う）に心躍らせるさまをたんねんに追ったもので、作者はやはり米国人です。ポサダで使うピニャタ（お菓子を入れたくす玉人形）を並べ売る賑やかなマーケットの天井に、パペルピカドが吊されています。2冊とも外国の作家による絵本ですが、いずれにもメキシコの人びとへの深い愛着と敬意が感じられます。とりわけ『ポインセチアはまほうの花』に描かれたパペルピカドは、クリスマスを待つ人びとの敬虔な心やこの時期の高揚した空気を伝えながらはためき、またそこには少女の複雑な気持ちも混じり、忘れがたい印象を残します。

パペルピカドのワークショップ

さて今回の図書展は、ラテンアメリカについて書かれた子どもの本をみなで楽しむ場として企画されました。しかし、本が並んでいるだけで人びとは足を運ぶだろうか。すでに本に親しんでいる子どもだけでなく、本を開く機会の少ない子どもたちもやってきて本にふれてもらうには……。そこで思いついたのが、パペルピカドの出てる絵本を紹介し、それから実際に



パペルピカドをつくって楽しむというワークショップです。さっそくワークショップ班をつくり、パペルピカド作家でもあるチカーノ・アーティストによる「つくり方」の本を手引きに、試行錯誤がはじまりました。メキシコのパペルピカドについての本格的な書籍は日本にはあまりないように思います。とくにそのルーツについては、用いられる薄紙がpapel chinoと呼ばれることから中国との関わりも想像されますが、くわしい歴史はわかりません。もしご存じの方がおられたらぜひ教えていただきたいと思います。市販のパペルピカドのほとんどは、カッターまたは機械（大量生産の場合）でつくられているようですが、さきの本ではハサミを使います。家庭で誰でも楽しめるやり方です。紙を縦横あるいは斜めに何回か折りたたんでから切り込みを入れますが、折り方を変えることで同じ切り込みでも開いたときの模様がちがってくるのです。幾重にもたたむことから、紙はやはり本場のpapel chinoのような薄さでなければなりません。素材さがしもひと苦労でしたが、意外にも近所の花屋で包装用に幾色もとりそろえているのを見つけ、落着。また、切り込む模様には星、花、鳥、虫などさまざまなモチーフが可能ですが、型紙を用意し、数種類の模様を再現

できるようにしました。こうして迎えた当日のワークショップには、子どもから大人まで大勢が参加し、本の傍らでパペルピカドづくりに熱中しました。折りたたんだ紙を開くとき、またできあがりをずらりと並べて吊すときは、パペルピカドの魅力が花開く瞬間でした。

おわりに

本に関連するこのようなワークショップは、図書館関係の方々からの関心も高いことがあらためてわかりました。ラテンアメリカの豊かな手仕事の文化は、子どもや子どもの本との接点において、こうした試みのさまざまな可能性を秘めているように思います。今回の図書展では、パペルピカドのほかにグアテマラの《心配ひきうけ人形》づくりのワークショップも行いましたが、こちらについてもあらためてご紹介できればと思っています。

写真はワークショップで説明に用いたパネル。
©CLIJAL, F.Uchino

*『ポインセチアはまほうの花 メキシコのクリスマスのおはなし』（ジョアンヌ・オッペンハイム文、ファビアン・ネグリン絵、宇野和美訳、光村教育図書）／『クリスマスまであと九日 セシのポサダの日』（マリー・ホール・エッツ&アウロラ・ラバスティダ作、マリー・ホール・エッツ画、たなべいすず訳、富山房）／参考文献：Carmen Lomas Garza, Making Magic Windows: Creating Cut-Paper Art With Carmen Lomas Garza, Children's Book Press, USA / 同じ著者によるIn My Family/En mi familia, Children's Book Press (英/西二カ国語版) もパペルピカドやメキシコ系の人びとの暮らしを伝える絵本として、図書展で原書展示しました。

*今後こうしたワークショップのマニュアルも整備していきたい考えです。関心のある方はtdcljal@gmail.com までお問い合わせください。

第64景

「座頭市」は革命キューバの英雄だった

★ハバナ大学でキューバ映画史を教えているマリオ・ピエドゥラ教授（66）が2012年11月8日、東京・神田駿河台の明治大学で「1967年から77年までのキューバにおける『座頭市』」と題して講演した。極めて興味深い内容であり、要旨を以下に採録する。

☆1959年元日のキューバ革命後、短期間に10万人に識字教育が施された。このため、彼らは映画の字幕が読めるようになり、映画人口が増えた。当時の映画館総座席数は32万席だった。米国系の映画館はすべて接收され、国有化された。

☆当時、年間400本の映画が上映され、半分は米国製だった。革命後、ハリウッド映画に代わって、ソ連から社会主義リアリズムの作品が入って来た。それは、キューバ人の好みに合わなかった。

☆なぜなら、「社会主義の完全な英雄」を強調する宣伝映画ばかりだったからだ。退屈だった。米国の映画は活劇でも何でも観客を楽しませる工夫が十分施されており、キューバ人大衆にも好まれていた。

☆キューバ映画芸術産業庁（ICAIC=イカイク）のアルフレド・ゲバラ長官（当時）は1960年後半、キューバ人を楽しませることのできる真面目で面白い映画を探し始めた。イタリア、フランス、スペイン、そして日本へと、代表団が映画探しのために派遣された。（同長官は現在、国際ハバナ映画祭組織委員長。）

☆代表団は日本には1961年に1カ月滞在し、「座頭市」などを確保した。前衛的で斬新な作品に取り組んでいた黒木和雄監督にも会っている。（黒木監督の「とべない沈黙」=1966年=はキューバの映画人にとって驚くべき作品だったという。同監督は後にキューバで、津川雅彦主演の「キューバの恋人」を撮影した。）

☆キューバ人にとって、刀で戦う映画は一括して「チャンバラ」であり、「シネ・サムライ」というジャンルになった（日本では「時代劇」）。これが西部劇などハリウッドの活劇に代わって、観客の心を惹きつけた。

☆「座頭市」シリーズは1967～77年にキューバで計16本上映された。「盲目のマッサージ師・市」が縦横無尽に活躍するというパケテ（誇張された虚構）が大いに受けたのだ。米映画の英雄は体制や制度を

守るが、座頭市は正義派ながら体制に抵抗する。この点がまた支持された。つまり座頭市は「資本主義者」でなかったのだ。

☆座頭市はキホテスコ（ドン・キホーテのような冒険者）で、かつカバジェレスコ（騎士道=武士道精神に満ちた人物）だった。女性を守った。これが革命体制と合致した。

☆主演の勝新太郎は1975年、ICAICの招きでキューバを訪れた。旅客機から姿を現した時、仕込杖を手にした座頭市の格好をし、映画の中のような振りを見せた。これが出迎えた我々やメディアを湧かせた。真のスターだった。

☆キューバでは勝新太郎と三船敏郎がスーパースターで、仲代達矢はやや及ばない。勝新太郎はキューバで誰とでも気さくに話し、ユーモアを発散させていた。

☆「座頭市」は制作されなくなり、勝新太郎も亡くなった。だがキューバでは市（座頭市）は死んでいない。市はキューバのある時代の英雄だった。私の世代の英雄だった。キューバ人は誰も「ちょっとだけ市」なのだ。

★講演後の質疑応答での教授の回答：

☆キューバが日本から現在輸入している映画はアニメが中心。それは映画館が古くなり、上映条件が十分でないことも理由だ。入場料は兌換ペソの10センターボ（約2.4ペソ）と安すぎ、修復費が捻出できないのだ。

☆勝新太郎はキューバ訪問時に、フィデル・カストロ首相（当時）にも会っている。

★私（伊高）は、80年代に当時のアルマンド・ハルト文化相にインタビューしたが、その折、文化相から「『座頭市』をはじめ日本映画を導入したのは、世界には、ハリウッドつまり米国人と異なるいろいろな英雄がいる、ということキューバ人民に教えるためだった」と聞いた。この点について教授は、「座頭市が大ヒットしたため、イデオロギー的な教育効果が期待できるようになったのだと思う」との意見だった。

お知らせ：月刊誌「世界」2012年12月号（11月8日発行）に伊高浩昭執筆「チャベス・ベネズエラ大統領4選の意味」掲載。月刊誌「LATINA」12月号（11月20日発行）に同「現代パナマ情勢」ルポ掲載。

ケチュアのエッセー 母なる大地の怒り

チャパレ地方は美しい土地です。果物が豊富で、そこではあらゆる作物が実ります。昔は、人々はその土地にあまり行きませんでした。道がありませんでした。一部の農民が、キャッサバやコメ、あるいはコカを生産しても、運ぶ手段がなかったため、市場で売ることが出来ませんでした。

生産される作物を、コチャバンバの町に運びやすくするために道を開こう、と大統領が命じたのは、ごく最近のことでした。

突然、外国人が遠い国からやってきてコカの葉を知り、化学物質と混ぜて毒に変え、若者たちに気持ちが良い薬だと言って売り付け、大金を儲けました。そうして美しいチャパレの地に気の狂った人たちが現れるようになりました。昔から村に住んでいた人たちは、男女とも、もう村に居ようとは思わなくなり、村から逃げ出そうと考えました。チャパレで生産されるコカの葉は、白い粉の薬に加工されて人間の頭を狂わせます。人々の畑で働く意欲を失わせます。麻薬を作るためのコカの葉を踏む労働は代償が大きく、昼夜踏み続けてそれなりのお金を得ても、心の痛みを和らげることは出来ず、また体の痛みを治すことも出来ません。

そのような暗い生活の中に、さらに大きな不幸がチャパレの地にもたらされました。北からまるで戦争をするためのよう

て来て、チャパレの地の真ん中で銃弾をうちまくり大地を汚し、私たちの仲間を恐怖に落とし、野生の動物たちは逃げました。そんな残酷な侵略行為の後、チャパレの地を痛めつけて全ての勝利者のように、彼らの国へ飛び去りました。

この侵略は母なる大地を怒らせました。おそらくそれが理由で、この金曜日に私たちのボリビアに地震が起きました。人々は怯えて、天変地異が起こるのだらうと思いました。

私たちはそうは考えません。国の指導者たちが、北から兵士たちを呼び寄せたために、母なる大地が怒ったのだと思います。

今日では、チャパレの地には外国人たちが行きかい、北からの兵士たちが駐屯し、無慈悲な銃撃に汚されています。

この悲惨な悲しみのすべては、誰の責任なのでしょう。どういう魂胆でこのようなことを命じたのでしょうか。母なる大地だけが、このわけを知っています。だから怒っているのです。

作者：アリシア・テラン・デ・ディク
「反逆者」1994年より
訳：栗原重太

音楽三昧♪ペルーな日々（第46回）

ニコメデスとクマナナ

アフロペルー音楽復興の挑戦とその意義

今、またアフロペルー音楽がさまざまな新たな試みに挑戦している。

アフロペルー音楽は、20世紀前半期には一度ほとんど失われてしまったとされながら、地方のアフロ系集住集落からの移民が首都のリマで「発見」されたことにより、忘れられたと思われていた伝統が再発見され、それをたたき台に現在のアフロペルー音楽は再構築されてきた。またその過程で、そのアイディアの源泉ともなった地方のアフロ集落においても、アフロ性が再確認され、自らのアイデンティティとして再構築する契機につながった。

アフロペルー音楽の復興運動の再燃についてはひとまず置いておくとして、今回はそのおかげで完全版として2011年に再販され、この度日本盤も発売されることになったニコメデス・サンタ・クルスと彼の一座「クマナナ」による伝説の名盤『クマナナ』について紹介したいと思う。

『クマナナ』が何故アフロペルー音楽における記念碑的作品であると言われるのか。

第20回でも取り上げたニコメデス・サンタ・クルス(1925-1992)は、ペルー最高の即興詩人(デシミスタ)であり、アフロペルー音楽復興の最重要人物であった。そのニコメデスの最高傑作と言われ、その後のアフロペルー音楽に大きく影響を与えたのがこの作品だ。さらにこの作品は、1964年に第1版が完成してから1970年まで3度の改訂が行われたほどニコメデスにとって重要な作品であった。LP2枚組で膨大な情報が詰まった冊子が付属し、1枚目はポエトリーリーディング14篇、2枚目は彼が収集したアフロペルー音楽及び、再創造した音楽14曲が収録さ

れている。ニコメデスによる膨大な解説は、民衆の即興詩の世界と、アフロペルーの踊りの起源についての彼の論考が中心になっている。

4行詩のコプラと10行詩のデシマがラテンアメリカに伝わると、民衆自身の表現として瞬く間に各地に土着化し、吟遊詩人の謡う即興詩の世界や、様々な舞曲のための歌として無くてはならないものへとなっていった。ペルーにおいては、その伝統はよりアフロ系の住民に受け継がれたとニコメデスは主張する。

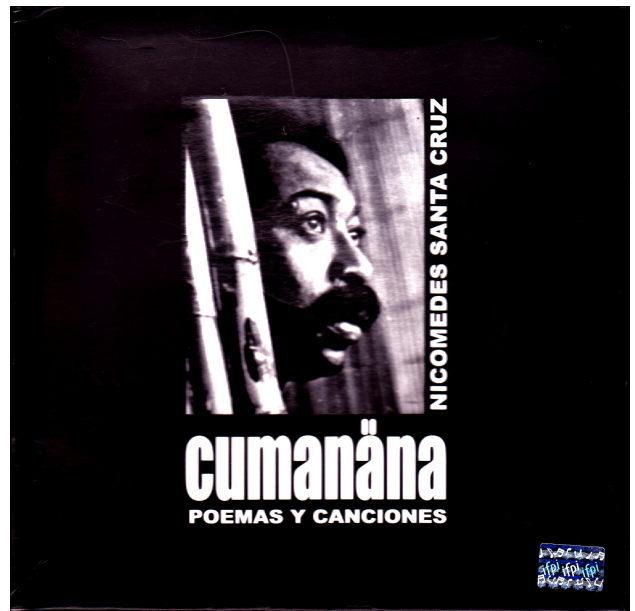
また、アフロペルーの踊りは、言うまでもなくアフリカにその起源の多くを負っている。ニコメデスは、ペルーのアフロ舞踊のほとんど失われてしまった起源を、キューバやブラジル、スペイン、ポルトガルなどの例を引きながらいかにアフリカの要素を強く残しているのか、ということ論じている。アフリカ西海岸、バントウ、ヨルバ系の通過儀礼として踊られる性交を模した豊穡と多産祈願の踊りルンドゥやカレンダに踊りの起源を持ち、オリチャ(オリシャ)を信仰する宗教的世界観がペルーにも伝わっていたとする彼の推論からは、彼自身証拠はないと言いつつ、まだまだあまり認知すらされていなかったアフロペルー音楽をアフロ音楽の正統としていかにして位置づけるのか、という彼の苦心が見て取れる。

『クマナナ』は、その意味において、ペルーにおいて黒人が担っていた文化的意義を極限まで高め、その重要性を理論によって補強しようとした、そういう作品である。そのために必要だった膨大な資料と彼の論考は、一般読者には明らかに難しすぎるが、失われつつあったアフロペルー文化を精一杯持

ち上げて後世の評価に備えようとしたとも言えるのかもしれない。さらに背景にはアメリカ公民権運動の盛り上がりやアフリカ諸国の独立なども彼のアフロペルー文化復興運動を支える大きな潮流として存在した。

彼の指摘の中で重要なものの一つに、「アフロペルー音楽の白人化」が挙げられる。アフロペルー音楽が注目を浴び、演奏される機会が増えていくに従って、「白人がイメージするアフロ音楽」像に擦り寄り、改変し、またショーを盛り上げるために「ハリウッド的効果」を挿入してしまう状況がすでに64年の段階で出てきていたとニコメデスは指摘している。この状況はその後とも変わることなく、彼が危惧した通りアフロペルー音楽は相当部分「白人化」されてしまった。今このタイミングで、音源のみをピックアップした『クアナナ』編集盤でなく、彼の論考付き2枚組の完全版として再版されるのは、再びアフロペルー音楽を再評価し、再創造しようと動き始めた昨今の状況が、こうしたアフロペルー音楽の安易な「白人化」を戒めたい、ということもあるのかもしれない。

といろいろ書いてきたが、どれだけ高説をのたまわっても、実際の作品がショボければその説得力は半減する。その意味でも、ニコメデスが胸を張って言っている通り、まさにその時代の最高のメンバーが集った奇跡的な楽団だからこそ生まれた素晴らしい作品のオンパレードになっている。1枚目のポエトリーリーディングは、ニコメデスの渋い低音の声で躍動的に、そして情感たっぷりに朗唱される詩の響きに、その言霊に酔いしれ、2枚目では、収集された古い曲から再創造された創作曲まで素晴らしい



楽曲が目白押しに並んでいる。意味のない呪文のような不思議な言葉が唱えられるランドーの元祖サンバ・マラトーは、聞いているだけで楽しくなるし、カイトロ・ソトの歌で有名なアフロペルーの伝承歌「トロ・マタ」も、農作業歌パナリビオの中にさりげなく部分的に違うバージョンが紛れ込んでいたりする。その他子どもたちのあそび歌や闘牛士を称える歌、子守唄から物売り歌、そしてなんといっても素晴らしいマリネラ・リメーニャまで聴き所満載の、まさに名盤中の名盤となっているのである。

また彼が解説しているように、40年代からリマの民俗舞踊アカデミーで再創造されたフェステホは、当時残っていたいろいろなアフロ音楽の踊りからのパッチワークによって産み出された混淆の踊りであり、民衆の踊りというよりは、音楽家と聴衆によって広まった新しいスタイルのアフロペルー音楽だった。今やアフロペルー音楽を代表するこのリズムが、そのようにして「作り出された」踊りである、ということ改めて考えなおし、何がペルーの「アフロ」音楽なのか、ということを考えてみることも、一つなのかもしれない。まあ、いろいろ書いてはみたが、ともかくいいからぜひ聴いてみて欲しいことなのである。

鶏とセロリのトマトソース煮

Pollo con Apio en Salsa de Tomate

まもなく2012年が終わろうとしています。毎月ご覧いただきありがとうございます。これまで紹介したレシピをみなさんが料理できるようになっていたらうれしいです。

クリスマスイブの夕食には、鶏肉を食べる習慣があるので、今回はメキシコ風の鶏料理をつくりましょう。とてもおいしいので、ご家族もお客さんも喜んでくれると思います。

メキシコのイブの料理には多くのパターンがありますが、七面鳥や塩ダラ、豚肉のハム、鶏肉を使うのが一般的です。

ユカタン半島では、クリスマスのような特別の日これら料理をつくり、ニンジンやカブ、ジャガイモ、ブロッコリー、カリフラワーをゆでたサラダを添えることもあります。これらの野菜のうち3種類ほどの野菜をゆで、好みの形に切って大きな平皿に飾ります。レタスやドレッシングを添えてもよいでしょう。

今回の料理にはフランスパンやごはんがはいます。レシピでは、サフランとクミンで風味を加えたライスを紹介しました。



ユカタンでは、どんな階層の人もマヤ民族の人々も、イブの夜に鶏肉を食べています。

私たち兄弟は子どものころ、熱を加えて甘みが増したセロリが大好きでした。日本では、セロリ嫌いが、特に子どもに多いようです。おそらく香りがちょっときついからでしょう。でも本当はとても爽快な風味です。今回の料理は鶏肉とセロリと一緒に調理するので、セロリ嫌いな人にも気に入ってもらえると思います。

来年もまた、ここで紹介するレシピを活用して料理のレパートリーを広げてくださいね。メリークリスマス！ 来年もよろしくお祈りします。

■材料 4人分

- ・鶏肉 (どの部位でも可。もも肉でも胸肉でも) 500g
- ・トマトの缶詰 1缶
- ・葉を取り除いたセロリ 1本
- ・タマネギ中 1/4
- ・コリアンダー 大さじ2杯
- ・コショウ 塩
- ・粉末クミン
- ・水 1/2カップ
- ・米 4人分
- ・サフラン 小さじ1杯

■作り方

- 1) トマト缶を開ける。タマネギを細切りにする。
- 2) コリアンダーを細かく刻む。
- 3) セロリを洗って葉を取り、堅い筋を取り除く。その後、薄い半月形など、スプーンで食べやすい形に切る。

- 4) 鍋かフライパンに、鶏肉とトマト、水、タマネギ、セロリを入れて、適量の塩とコショウで味をつける。
- 5) 蓋をして、10分程度少し強めの火にかける。焦げないように時々鍋を動かす。火を少し弱めて、水が足りなければ少し加え、さらに動かしながら加熱する。よく火が通り、ソースがペースト状に煮詰まったら火を止める。

【サフランライス】

- 6) 料理をはじめ1時間ほど前に、サフランをカップ1杯の水で溶かしておく。
- 7) 米の量は通常の4人分。洗った米を電気炊飯器に入れ、サフランを溶かした水を加える(サフランは入れない)。その後、足りないぶんの水を加えて炊く。炊きあがったら、お好みの量のクミンと塩を加え、米が黄色になるまでよく混ぜる。皿に盛るときは、茶碗にごはんを詰めて大きな平皿に載せる。最後に鶏肉を載せてソースをかける。

リチウム 南米で期待される資源

リチウムは石油が変わってエネルギー革命の担い手になることが予想されている。すでに電子部品やコンピューター、携帯電話などに使用されている他、リチウム電池を使ったハイブリット車が2020年には数千万台から数億万の大台にのぼると試算されている。ボリビア、チリ、アルゼンチンに世界のリチウム4千万トンの半部以上が眠っている。リチウムの埋蔵量はボリビアのウユニ塩田が世界最大であるが、産出する最大国はチリで、世界第2位のアタカマ塩田がありオーストラリアとともにリチウムの主な産出国である。採掘をめぐって南米では多くの人が私企業へ採掘権を与えることに反対している。がチリやアルゼンチン、ボリビアは外国企業の誘致をしている。今年の9月にトヨタがアルゼンチンのオラロスの塩田の25%を買ったと報告した。

リチウムは1998年から価格が倍以上に上がったが金や銅に比べるとリチウムの取引市場は小さく、銅の100分の1の価格である。需要が伸びており、埋蔵量は多いが、実際に使用する量が少ないため付加価値をつけなければならない。アルゼンチンは南米でリチウム電池を製造しているが、必要な部品は海外から輸入して組み立てている。現在リチウム電池工場は主にアジア諸国特に日本と、米国にあり、この市場を開発するために何億ドルも投資している。(BBCMUNO 2012/10/12 より)

ブラジル：アマゾンの森林伐採が進む

今年1月から8月にかけてブラジルのアマゾンでは15万6千300ヘクタールの森林が減り8月だけで5万2千200ヘクタールが消失している。大規模な森林伐採は西部のマツグロソ州と北東のパラ州で行われている。マツグロソ州のシノップ地区では牧畜と農業によって1万800ヘクタールの森林が伐採され、それに続いてパラのアルタミラ地域ではペロ・モンテの水力発電の建設によって、1万ヘクタールの森林が伐採された。2000年から2010年の間に平均2,600万ヘクタールの森林が消失した。ブラジル政府は、森林消失ペースを落とすという公約を2008年から掲げている。が、ブラジルの開発銀行は1年間に10億ドルをダムや道路建設などのインフラ整備のために拠出し、森林を危機にさらしている。しかも農業・牧畜業者が森林保護政策を緩和するよう圧力をかけており、その結果今年5月には骨抜き森林保護法が通過し、ルセフ大統領はその一部を拒否しなければならなかった。科学誌ネイチャーは今年初め森林消失と、農業、気候変動がアマゾンの生態系を衰退させ、保水力と降雨量の減少をもたらしていると警告している。森林消失による降雨量の減少はアルゼンチン、パラグアイ、ウルグアイ、ブラジルの南部などの離れた地域にも影響を及ぼすという調査もある。アマゾンは山火事、森林消失や気候変動により森林の回復能力が弱くなっており、森林消失を減らす努力にもかかわらず危機的状況にある。(Noticiasaliadas.org/2012/9/27 より)

コロンビア：100年前にアマゾンで起きた悲劇を追悼

アマゾンの先住民族はゴムを採取するために20世紀初頭から被った死や苦しみ、侮辱を100年間の沈黙の中に留めてきた。しかし今年の10月12日、ウイト、ボラ、オカイナ、ムイナネ民族は過去からの教えなくしてより良い未来を築けないとして悲劇を公式に追悼した。追悼式はコロンビアのチョレラにあり今は不名誉な歴史を残すカサ・アラナで行われコロンビア政府や国外の共同体の代表者、ブラジル、ペルーからの先住民が集まった。今は先住民学校が営まれている。

建物は、ペルーとイギリスの合同会社ペルビアン・アマゾン・カンパニーが100年前にゴムの集積場所として建てたもの。そこで先住民を迫害し、奴隷とし、殺害するなどひどい搾取を行った。ゴム業者の暴行は当時マナオスのイギリス領事だったロジャー・ケースメント(マリオ・バルガス・リオサの『ケルト人の夢』のモデルとなった)が当時の様子を記録しており、20世紀初頭のゴム投資ブームで4万人以上の先住民が亡くなった。合同会社はその1年後に解体されたが、カサ・アラナは1932年まで操業し、ゴム業者の暴行によって10万人の先住民が殺された。追悼式にはイギリス大使も出席し、ジェノサイドだったと認め、人権を守る義務があると述べた。コロンビアのマヌエル・サントス大統領は9つの先住民に対して、全ての犠牲者とその遺族に対して、これらの悲劇に対する謝罪文を送った。(BBCMundo 12/10/2012 より)

「沈黙を破って～グアテマラ戦時下性暴力スピーキングツアー～」が終了しました。マヤの女性たちはいつも、凄惨な内戦の被害者でありながら、人懐っこく笑い、見慣れない日本食も進んで口にしたり、写真を撮ったりと、あどけなく朗らかな表情を見せてくれます。尊厳を求めるたたかいの中でも、自然体であり続ける強さとそれを可能にする知恵に、今度はポスト3.11を生きる私たちが学ぶ番だと確信しました。

期間中、私は民芸品の発送と販売に努め、色彩豊かな手作りの品々が、来場者の方々に縁付いていくのを見送りました。あの小さなモノたちが、暴力のない世界をめざす私たちを結びつけてくれることを願っています。(佐々木玲子)

次回の「そんりさ」発送作業は 月 日(土)の予定です。

参加いただける方は連絡ください

メーリングリスト 会員・購読者は無料で参加できます。

E-mail recom@jca.apc.orgまでアドレスを連絡ください

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| Vol.139 グアテマラ・沈黙を破る女性 | Vol.135 あるコロンビア難民の死 |
| Vol.138 パナマ先住民族ンガベ・ブグレ | Vol.134 グアテマラ・ニカラグア報告 |
| Vol.137 グアテマラ視察報告 | Vol.133 グアテマラ総選挙 |
| Vol.136 ボリビア先住民族政治と道路建設 | Vol.132 ボリビア・ガソリン危機 |

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』,資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方
TEL&FAX 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・
FAX・手紙もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

15万3907円

<グアテマラ基金>

61万5700円

(2012年11月現在)